
僕の想愛(きもち)は浮遊中。

天矢 綱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の想愛^{おもひ}は浮遊中。

【Nコード】

N1365BA

【作者名】

天矢 綱

【あらすじ】

隼人が莉奈に告白しようとしたら、莉奈の彼氏（？）が登場！？でも、その男のホントの正体は…？

伝えても伝わらないってどうしたらいいの？

僕の運は限りなく零(ゼロ)に近い。(前書き)

これはもう何がなんだかわかりません(笑)

とりあえず読んでやって下さい><

「どういこと？」

いや、わかるだろ。そう心の中でツッコんだ。

というか分からないということとは、こいつはバカなのか…？

その前にこいつ誰だよ！人が告白しようって時にいきなり教室に入ってきて…。普通なら立ち去るよな？僕なら無言で立ち去る。できなかつたら1億円やろう。

「昂ちゃん！？ち、違うの！」

必死にこの出来事を何もなかったかのようにいう水連寺さん。でもまだ何もおこってないんだけどね。

普段、おだやかで分け隔てなく接していてクラスでも好かれていた優しい。なのに、こんなふう慌てる水連寺さんは初めてだ。って待って待って待って！昂ちゃんって誰だ？あだ名！？

男子の名字を“くん付け”でしか呼ばない水連寺さんがこの男をあだ名！？え？え！？どういこと！！？

「この前、俺に好きだって言ったくせに…。あれはやっぱ嘘だったのか？」

何い！？

「違うって！今、私はこの人に呼び出されただけで、それで丁度私が出来たときに、昂ちゃんも来ただけ。誤解しないでっ！」

莉奈が人に告るなんて…この2人って付き合ってるのか？え？これ僕の今の立場って完璧悪者じゃん！

「おい、お前！ 莉奈に何の用があつたんだよ！！」

「いや僕は…」

ハッキリ言つべきなのか…？いや、明らかにこの2人両想い…やはりここは…

「僕はただ…こ、この手紙を届けてもらつるように渡しておいてくれ。と頼まれただけで…その人は僕も誰かは分かりません。でも制服は風中^{ウチ}じゃなかつたですね。」

僕は咄嗟に嘘をつき、

「手紙だとお！？どこの誰だよ！そいつ許さねえ！！」

「それで手紙がこれです。」

手紙を渡した。

「名前がねえな…くそっ」

名前書いてなくてよかつたあー！！

「まあいい、莉奈帰るぞ。」

「えっ！私…あ、ちよつと腕引つ張らないでよ！」

昂ちゃんと呼ばれた男は、莉奈とともに教室から出て行った。

んにも心配することはない。そう思っていた。

“心配することはない”そう思っていたのに…
まさかあんなことになるとは今の私にはわからなかった。

僕の運は限りなく零(ゼロ)に近い。(後書き)

ジャンルは恋愛とありますが、恋愛が含まれるものと考えて下さい

(笑)

作者もなんかちょっとノリで書いています。

更新は…1週間とか10日とか…

1か月になるかもしれないかも

僕の睡眠（しあわせ）は邪魔されるのが当たり前。（前書き）

がんばりました…読んでくれると嬉しいです…

僕の睡眠（しあわせ）は邪魔されるのが当たり前。

僕はなぜか朝早く目覚めたため、普段遅刻ギリギリの僕は、15分前に教室の席についた。

「よっ隼人！」

相変わらずこのハイテンションをどーにかしてもらいたいものだ。

「うるせーこのハイテンション野郎！」

なんとなく悪態をついてみた。

「なんだよーつれねーなあ。ハイテンション野郎じゃなくて俺にはちゃんとした高田純也たかたじゅんやっつー名前があんだよ」

「はいはい」

適当に相槌を打っておいた。

僕にはこんなどーでもいい会話よりも、昨日のあの2人のことが気になる。結局告白にも失敗したしなー…。

「おい隼人ー！あの2人つてなんだよ？昨日一緒帰れないっていったのは、告白しに行ったからだったのか？」

「そーそー…って、え！なに人の心ん中呼んでんだよ！エスパーか！！」

なんだこれ…？

四つ折りされた紙を拾い、中を開いた。

.....

To 柊くん

お弁当の時間に中二階にきて下さい。話があります。

From 莉奈

.....

え？これって…？？？

僕の睡眠（しあわせ）は邪魔されるのが当たり前。（後書き）

次の展開はまだまだ悩み中…どーしましょう 汗
アドバイスいただけるとうれしいです…。

僕は会話（しよくよく）が全然ない。（前書き）

今回は会話なしです…。

しよくよく

僕は会話（しょくよく）が全然ない。

今日の授業は全く頭に入らなかった。

僕はずっとあの手紙のことについて考えていたからだ。

きっと水連寺さんと昂ちゃんという男は付き合っていて、それが僕にバレてしまったため、僕の弱みを握って付き合っていることをバラさせないようにする。もしバラしたら…恐らく僕はその時点でこの世にはいないのだろう。

昨日のことで、水連寺さんの印象がガラリと変わってしまった気がする。

いや、気がする…というか変わったと僕が勝手に思い込んでるだけかもしれない。

でもあんな不良みたいな男に水連寺さんが告白するなんて…やっぱり表では皆に笑顔をふりまいていて、裏では水連寺さん自体があんな感じなのかもしれないと思う。

（キーンコーンカーンコーン　コーンカーンキーンコーン）

チャイムが鳴ってから、僕は水連寺さんの席の方を見た。

僕の席は左から2列目の前から3番目。日当たりとかがもの凄く丁度いい。

中2になってからずっと窓側だから快適すぎて困る。

水連寺さんの席は左から3列目の前から1番目。教卓の一番前だ。

あの席はみんな嫌がっているけど、水連寺さんにとってはなんともないようだ。

さすが成績優秀。

つとあれ？水連寺さんがいない…？

まさかもう行ったのか？

…なんていう風になる前に席の方を見たのだ。

すると、水連寺さんも同じようにこちらを見ていた。

息ぴったり！そう思った。

一昨日までの水連寺さんとこんな風に目があつたなら、ジャンプするなり、ガッツポーズするなりと喜びを身体全身を使って表現していただろうが、今は、…無言。というか、相手の出方を待っている。

クラスのみんなは、授業が終わると同時に、ダッシュで購買にある数少ないパンを買いに行っているため、クラスには十数人前後といたったところだ。

水連寺さんは辺りを見回して、僕の方を見て頷いた。

いや、この場合頷くのは僕の方だと思っただけだなあ…と思っっているうちに、水連寺さんは教室から姿を消していた。

慌てて僕も席を立って追いかけた。

僕は会話（しょくよく）が全然ない。（後書き）

ST「はがない」ですね（笑）

なんか内容が混乱してきた…くあー…

ご意見お待ちしてます。

僕の体力(ちゃんす)はLv・4並に等しい。(前書き)

なんとか4話…。

楽しんで読んで下さいなっ

僕の体力(ちゃんす)はLv・4並に等しい。

一言言うと、この学校は広い。

今、僕は水連寺さんに“お弁当の時間に中二階に来てくれ”と言われ、先に行った水連寺さんを追いかけるようなカタチで中二階に向かっている。

購買と中二階は真逆方向だから人は全くいないだろう。

風中こと、風浜中学校の体育館は広いがバスケット部やバレー部を主に使わせるため、中二階を設置し、そこでバトミントン部などが活動できるようにした。

“中二階”と言われて、ピンとこない人は、“ホール”みたいなところだ。一応、この学校にもホールはありますが。

昼食の時間帯に呼ばれてしまったため、腹が減って仕方がないが、走っていることで空腹を忘れてしまう。

それよりも、走っているとこのように、一向に水連寺さんに追いつかない…。角を曲がるときに水連寺さんの後ろ姿が見えた。

やっとみつけた！

そのまま走り続け、中二階の階段の前まで来ることができた。すでに僕は息があがっている…無理もないと自分でも思う。

僕たち2年生の教室は5階にあり、天井と床の長さがハンパなく長いので、つまり階段も長い。だから息があがってしまうのだ。

一度深呼吸してから、ゆっくりと足を進める。

最後の階段を上り切って、辺りを見回す…。左には体育館、右には窓。前奥にはドアがあるだけでいつもと変わらない風景だ。

「あれ…？」

水連寺さんがいない。

ここに行ったのは見た…。じゃあ、行けるところは1つ…。僕は前奥のドアを目指して、歩き、ドアノブを回した。

そこに、真剣な眼差しの水連寺さんが立っていた。

「水連寺さん…話って一体…」

「昨日のこと…。」

「え？昨日ってああ…」

「弟あれがいるっていうこと…言わないでほしいの」

“あれ”…って。ああ、彼氏あれってことか…。

「うん、わかった。人にバレると面倒ってことか。」

「え？う、うん。面倒っていうか、家の家訓というか…まあとにかく、だから弟あれがいるってバレちゃダメなんだよね…。家うちって変わってるでしょ…。」

こんな真面目な水連寺さんに、不良の彼氏がいるなんてバレたら大変だもんね。なるほど。

「そんなことないよ。普通（の対応）じゃない？」

「…ありがとう」

「え？」

「そんなこと言われたのはじめてだから…。だから、ありがとう。」

水連寺さんに「ありがとう」「何て言われたのはじめて…。しかもこの笑顔…チヨー可愛い…！！」

「ぼ、僕…す、水連寺さんのこと…！！」

（キーンコーンカーンコーン コーンカーンキーンコーン）

「え？なんか言った？ チャイム鳴っちゃったから急いでゴハン食べないとね！ じゃあね！」

「あっ…」

ドアを開けて走って行ってしまった…

やっぱり“悪運命の鐘”だよ…はあ…。

でも、2人は付き合ってるから失敗してよかったのかも…。
でも、自分の気持ち伝えなかった…。
でも、2人は…でも…でも…はあ…。

僕の体力(ちゃんす)はLv・4並に等しい。(後書き)

なんか隼人がチキンすぎるし、残念でならない…。

でも次からコメディっぽくなるかも。

というか…なってる。的な!?

なんか隼人が一人で盛り上がってます。次の5話結構好きかも。

次は(も)読んだほーが得だぜ え

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1365ba/>

僕の想愛(きもち)は浮遊中。

2012年1月6日18時48分発行